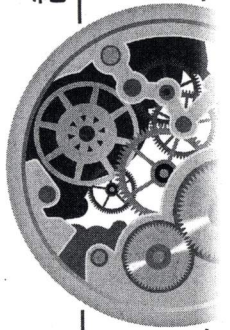


越境精神

小長谷 有紀



梅棹忠夫の残したものの

14

ベンゼン核と吉良竜夫

去る7月19日、梅棹忠夫が兄のように慕っていた吉良竜夫が91歳で亡くなった。梅棹の1年先輩で、さまざまな学術探検とともに企画した、盟友たちの1人である。

昭和16年頃、学術探検家を志す学生たちは、今西錦司をリーダーとしてひっぱりだし、フォロワーシップを発揮した。グループの名前は6個の炭素原子の結びつきに由来して「ベンゼン核」。京大6人衆である。

梅棹忠夫は理学部で動物学、藤田和夫は理学部で地質学、本野洋一は理学部で地球物理学、川喜田二郎と伴豊は文学部で地理学、吉良竜夫は農学部で農学を専攻していた。諸分野にわたる学際的な友だちの輪が形成されていた。

梅棹と吉良と一緒に探検したのは、西太平洋のポナペ島(現在のポンペイ島)と、中国東部の大興安嶺である。それぞれの成果として今西錦司編の報告書が出版されているが、もし吉良がいなければ学術的な記載という面で大いに精彩を欠いたものになったことだろう。

梅棹は今西とともに、学術探検

切磋琢磨しあう盟友



梅棹忠夫の「米寿の会」に訪れた吉良竜夫
(平成20年6月1日、千里阪急ホテル)

の記録報告書『ポナペ島—生態学的研究』を張家口にある西北研究所で受け取った。そして、実質的な編者である吉良に宛てた手紙で、労をねぎらうと同時に、次の

ように述べている。
「君の『生物』のところ、いままで、別に何とも思っていないが、よんでみて、これが一介の大学生の書いたものかと思うと、まことに驚嘆すべきものがある。ポナペにおいて自分自身は何もし

なかつたことを思いかえすと、まったく恥しい思いをしなければならぬ。『まけるものか』とまげん気を出している。まげん気を出して、どっさり収穫をもってかえりたいと思っている」
互いに敬意をもって切磋琢磨しあう友人だったことが了解されよう。

梅棹の『文明の生態史観』は、ユーラシアを生態学的に類型化して捉える考え方に基づいている。これはそもそも、今西の主催する共同研究会で、川喜田が発案し、吉良が緻密に計算して地図に描いた成果を会得した結果の発想であった。吉良は、温帯における植生分布を正確かつ簡単に量的に説明する指標として「温度指数」という考え方を提案し、日本の植物生態学とりわけ森林生態学の草分けとなったのだ。

梅棹と吉良は大阪市立大学では同僚でもあった。聞くところによると、梅棹は胃が痛くなるほど大衆での講義を嫌っており、フィールドワークのために不在がちで、しばしば吉良が代講した、という。河合雅雄によれば「くびになりませ。吉良さん、すぐ困ってはりませ」と諷めると、吉良に迷惑をかけまいと授業に出かけたらしい(『考える人』2011年夏号、追悼特集梅棹忠夫)。人との出会いが人を作っている。(国立民族学博物館教授)